

ウェブコラム① 誰がマクロ計量モデルを殺したか

マクロ計量モデル（計量経済モデル）とは現実の経済活動を消費関数や投資関数などの式（関数については unit 3 を参照）で表現したものであり、予測や政策評価に広く活用される。関数における変数間の関係は係数で決められ、係数は現実のデータの動きをうまく説明できるように統計学的に選ばれる。日本でも、経済企画庁経済研究所（現内閣府経済社会総合研究所）が開発した EPA 世界経済モデルや日本経済新聞社による NEEDS 日本経済モデルなどが広範に利用されてきた。

マクロ計量モデルの開発は 1930～1960 年代にかけてアメリカで急速に進展した。その中心となったコウルズ委員会（コウルズ財団）の成果としてアメリカの計量経済学者クラインによるマクロ計量モデルはあまりに有名である。1950 年に発表されたクライン・モデルはわずか 6 本の式から成っていたが、その後のマクロ計量モデルは大規模化の道を猛進する。大規模化したマクロ計量モデルは瞬く間に経済分析の世界を席卷し、さまざまな研究機関がその開発に傾注した。

しかし、このような伝統的マクロ計量モデルの栄光は少なくとも学術的な意味では長く続かなかった。決定的だったのは、アメリカの経済学者ルーカスによって 1976 年に発表された批判（ルーカス批判）であったと言われている。ルーカスは、マクロ計量モデルが基礎とする関数関係が安定的ではないと批判した。その根拠は人々の期待（予想）形成にあった。たとえば、新たな経済政策の発動によって消費者の将来予想が変化すると消費関数の形状は変化してしまうのである。その後もシンクタンクや官公庁において政策評価のためにマクロ計量モデルの開発は続けられたものの、ルーカス批判を契機に学術研究としての価値は急激に低下した。近年では、ルーカス批判に応じるべく、期待形成を考慮したフォーワード・ルッキング・モデルの開発が盛んになっている。

だが、ルーカス批判だけが旧来のマクロ計量モデルを無用の長物にしたとは言いきれない。むしろ、マクロ計量モデルは大きくなりすぎたゆえに自滅したのではないか。複雑すぎる体系が分析の切れ味を鈍くしたのではないか。

同じ結論を得られるのであれば単純なモデルのほうが優れているというオッカムのカミソリを思い出そう。マクロ計量モデルは大規模化によって大事なカミソリを置き忘れてしまったのである。